町衆について

仲村研

日本三大祭のひとつ、京都の祇園祭のころになると、報道機関はそろって「町衆」（マチシュウ）を口にする。それほど「町衆」は現在人口に膾炙（かいしゃ）した言葉になっている。この「町衆」が祇園祭とのかかわりで頻繁に使われ出したのはそう古いことではなく、一九五〇年に林屋辰三郎氏が「町衆の成立」という論文を『思想』誌上に発表されて以来のことである。ごく最近では「町衆」は「王朝文華と町衆展」という名の、京都の業者の地場産業製品売りこみの宣伝文句にまで登場している。

林屋辰三郎氏の「町衆」は、太平洋戦争敗戦後の日本史学界の民主化のうねりの中で、中世村落（惣村・郷村）のもつ自治・反権力的性格を中世都市京都において検証される中で誕生したものである。林屋氏はその論文の中で「『町衆』という存在も、ほぼ明らであるように、この内乱（応仁・文明の乱　仲村注）を契機に都市生活の前面に進出し来った『町』に拠って、地域的な集団生活をいとなむ人々を指して、当時の日記・記録に頻出する名称に他ならない」と述べられ、この「都市生活の前面に進出し来った『町』」を「街路を挟む二つの頰」（『町衆』中公新書）と規定し、その「町」で生活する人々を「町衆」（マチシュウ）と称された。

林屋氏の「町衆」概念を要約すると、「町衆」は応仁・文明の乱後の京都に形成される生活共同体「町」の基本的構成員で、当時の史料に頻出する語句であること。「町衆」は「町」の自治、自衛をおこない、かれらの中核には、酒屋・土倉などの高利貸業者がおり、室町時代末期から江戸時代初期の文化のすぐれた担い手ともなっていること。また「町」の連合組織として町組が編成され、町組の中枢は高利貸業者である「上層町衆」が占めること、などを林屋氏は指摘されたのである。この「町衆」概念の規定は、日本の中世都市研究に大きな影響を与えたが、林屋氏の規定された概念とはかかわりなく、その後勝手な方向に独り歩きをはじめたのである。

ところで林屋氏は「町」を「マチ」、「町衆」を「マチシュウ」と読まれたために、以後、日本史辞典や高校日本史の教科書類から報道機関にいたるまで、この読みを採用してしまった。『角川日本史辞典』、山川出版社の『日本史小辞典』の辞典も例外ではない。前者は「町をつくって集団生活を営む人々。特に室町時代、京都の町々を構

成する人たちが、室町衆・三条町衆など町名を冠して町衆とよばれた」とし、後者も「南北朝動乱期をへて室町時代初期に発生した商人・手工業者による地域的団結組織。町衆は応仁・文明の乱後も所々に地域的団結の自治組織としての町組を作り、社会情勢の不安に対して自らの手で町を防衛した」と林屋氏の説をそのまま踏襲して「マチシュウ」を説明している。教科書も『標準日本史』（山川出版社）には「京都で勢力をのばした日蓮宗の法華一揆も、町衆とよばれる町民の自治組織を母体としたもの」としている。先ごろ目出度く完結した京都市編『京都の歴史』全十巻は、「町衆」はもちろんのこと、町組、町会所、町代、町年寄、町汁などの「町」の読みを、索引ではすべて「マチ」としているが、京都に関する限り、歴史用語の読みとしては誤りで「チョウ」が正しい。日本史学の権威を集めた『京都の歴史』の編さんが基礎的な誤りを犯したのであるから、これをそのまま受入れた側を批判することは当たらない。根元は一九五〇年の林屋氏の「マチシュウ」にあると思う。

応仁・文明の乱後の京都に成立する「町」が「チョウ」と称されていることは、公卿山科言継の日記『言継卿記』に頻出する「ちやう」でも明らかである。天文十七（一五四八）年二月十一日条に「一昨日鷹司室町へ盗人入云々、町衆手負有之」と、山科邸の近所の町内に押入った盗人と町衆とが争い、町衆が負傷している記事がある。この「町衆」は言継の用語慣行から「チョウシュウ」とするのが自然である。

「町衆」とは中世都市を形づくっている生活共同体「町」の基本的構成員である。中世惣村が独自の掟をもち、池沼、山野、耕地、家屋、宗教施設を共有し、米穀、金銭などの動産をもち、元服式にあたる烏帽子成、共同体構成員として認定される老人成、剃髪する入道成、戸主となる亭主成などをおこなったように、京都の「町」も「町」の地域（現在のチョウナイ）を単位に掟を制定し、共有財産として「町」へ出入する門、番屋、家屋（「町」の共有財産としての「町家」はチョウイエ、チョウヤといい、マチヤとは絶対にいわない。マチヤとは一般に都市の家屋をいう）などをもち、惣村と同様の通過儀礼をおこなっている。生活共同体という視点からすると、惣村に比定すべきは、「マチ」ではなく「チョウ」である。

平安京の都城制で条坊によって区画された内部の町（マチ）は、一辺が四十丈（約百二十メートル）で、その町は三十二の戸主（へぬし　南北五丈、東西十丈）に分割され、戸主は南北の方向に口を開かず、東西の二方向にのみ口を開いていた。したがって、「マチ」は東か西かのいずれかの面に口をもっていることになる。このような平安京の都城制の「マチ」は二面町（ニメンマチ）といわれるが、平安京を維持する諸制度の崩壊にともなって、南と北の方向にも口を開くようになり、四面町（シメンマチ）と称され、一辺四十丈の「マチ」が四つの方向に開くようになる。そののち、四面町の四つの面が各々分立して四町町（シショウマチ　四丁町とも書く）となり、そして分立した一面が道路をはさむ向い側の面と合体して両側町（リョウガワチョウ）を形成する。この両側町こそ生活共同体としての「町」（チョウ）であり、現代京都の

「チョウ」の原型である。

現在、京都市の住所表示は、たとえば、京都市中京区室町通三条下ル烏帽子屋町、同区蛸薬師通烏丸西入ル橋弁慶町と、京都の旧市街にある町名にはかならず「チョウ」が付されている。祇園祭の山や鉾を保管する町内は、原則としてこの両側町で「山町」「鉾町」と書いて「ヤマチョウ」「ホコチョウ」といい、「ヤママチ」「ホコマチ」と絶対いわないのは、「チョウ」成立の歴史過程からして当然のことである。なお「町」が「チョウ」であることは、戦国時代の自由都市と後代にいわれた和泉の堺、摂津の平野の旧市街や、近江の港湾都市堅田においても確認される。

イエズス会が日本への布教のために、慶長八（一六〇三）年編さん刊行した『日葡辞書』は、戦国時代以前の語彙の索引に便利なものである。その『日葡辞書』にはChōxu（チャウシュ）の項目はあるが、「マチシュ」の項目はない。Chōxuには「同じ町内の人々」（岩波書店『邦訳日葡辞書』）と説明され、加えてMachino xu（マチノシュ）という訓読みが付されている。『日葡辞書』において、音読みの項目には訓読みが付され、訓読みの項目には音読みが付されるのがこの辞書の方針であり、「マチノシュ」という訓読みがこの時代の京都に日常語としてあったことを意味するものではない。十五世紀後期の辞書『文明本節用集』にも「町衆」は「チャウシュ」とある。

以上のことから、「町衆」の「町」は、江戸時代の町奉行（マチブギョウ）の「マチ」のように、一般的な都市という意味ではない。生活共同体としての「町」を基盤に自治、反権力を志向する「町衆」は、「マチシュウ」ではなく「チョウシュウ」とするのが正しい。ただ村の衆や浦の衆にたいする都市の衆という意味であれば「マチシュウ」でもよい。事実、江戸時代、西鶴は「日本永代蔵」「好色一代女」で「町衆」と「町衆」とをはっきり区別して使用している。林屋辰三郎氏の提示された「町衆」の歴史概念を歴史用語と完全に整合させるには、「マチシュウ」よりは「チョウシュウ」がふさわしい。

しかし、現実には「マチシュウ」は報道用語、学術用語と定着している。例としては悪いが、「残滓」を「ザンサイ」と誤ってこれが慣用読みとなり、また「消耗」が「ショウモウ」とされている類と似通っている。しかし、「町衆」が一定の歴史概念を示すものである以上、その概念内容に適する読みをすることが、歴史学徒の義務であろう。それにしても、歴史概念を規定したり、歴史用語を読むことの重大さを、この「町衆」の文字は私たちに教示している。

（大学人文科学研究所教授）

後記　本稿は平凡社『月刊百科』№二三三号（一九八二年三月）の拙稿「中世の町と町衆」にもとづき、若干加筆したものである。

民話と教育

片山登美子

今、民話は滅びつつあると言われ、ブームとも言われる。どちらも真実で、昔話を語る老人達は少なくなっているが、その反面多くの若い人達が民話に興味を持ち始めている。民話の研究は民間でも学会でも盛んになり、国語教育の分野でも国民の情操涵養をめぐって盛んな論議がなされてきた。

大正期や昭和一けたに生まれた人にとっては、昔話の方が懐しい親しみ易い名称であるが、戦後の民話ブームは「民話」という言葉を定着させた。民話という言葉は江戸時代からあったらしい。一九五二年頃から木下順二、西郷竹彦、山本安英らによって「民話の会」がつくられ、伝統的な話の重みを含みつつ、現代的な新しいものを生み、民族のエネルギーを正しく表現する文化を創り出そうとする意欲的な活動がなされている。

日本での昔話の科学的研究は、柳田国男（一八七五～一九六二）によって「昔話採集の為に」という論文が雑誌「旅と伝記」に掲載（一九三一）され、民俗学的な昔話研究と採集の基礎があたえられた。

民話の本質、民話を子ども達に伝える意味は何であろうか。大川悦生氏は、現代人の生活は多くの文明の利器に囲まれて、ある意味では恰好いいかもしれないが、自分で表現できる心の世界がどんどん狭くなっている。民話には農民の中にあった図太さ、楽天的で豊かな、おおどかな意味があったのではないか。今日から見れば当時の苦しみの表現、単なる願望、いわゆる「大話」であるかもしれない。しかし底辺には何か変革したいという願い、辛さの叫びというものがあると思う。民話を生み出すというのは、それ自体抵抗であるし、自己主張だったと思うと語っている。

松谷みよ子氏も、民話に関心をもったのは、日本を知らないということから出発して、何か人間の原点のようなものを探したいとの願いからだった。今は活字の民話を伝えたり、研究したりすることが多すぎる。語りを聞くと文献や資料を見る時とは違うものが伝わってくる。先生や母親が民話を読んで、自分の言葉で語ることが貴重なのではないか……と民話伝承本来の姿である「語り」の重要性を強調している。

今日、自分の言葉で心の物語を語ることが、日常生活から縁遠いものになっている。語っているようでも、ただの解説や朗

読であったりで本当に語っていない。情報過多の時代に活字・映像文化に取り囲まれた現代が〝語り〟に求めるものは何か、語り継がれた本来の民話に何を学ぶべきかを考え直してみることも必要なのではないかと思う。真の「語り」としての民話が滅びかかってきたのは、聞き手がいなくなったためで、子どもの頃の優れた聞き手は、優れた語り手として育ったものである。現代都会生活は優れた聞き手を育たなくしてきたのではないかと考えられている。話は速く、要領よく、手短かに用件を、言いたいことはそれでわかった……という生活感覚で営まれる現代生活は一面味気なく、お互いの心の物語が育まれる余地もなく、心ゆくまで語り合い聞き合うこともできないのでは、と心配されている。

昔話の再話には自ずから相応しい文体があり、それは祖先から語り継がれた語り口を最大限に生かしながら、再話作家独特のリズムを持ち、文学的にも密度の高いものでなければならないと言われる。また再話の世界は文字で構築された文学とは異なり、目は文字を読んでいても、優れた語りを聞くような感動を伴うものであることが必要である。

昔話には語り継がれるうちに磨かれた日本語独特の豊かさ、美しい語り口がふんだんにある。しかも豊かな語り口をまねるだけでなく、現代語で継承してこそ再話の意味があると言われる。この再話も安易にされると昔話を継承するつもりが破壊につながることにもなりかねない難しさがあるようだ。

「子ども時代に読んだ本は心の体験とし

表1　小学校の国語教科書　日本の民話（昔話）

国定第1期	国定第2期	国定第3期	国定第4期	国定第5期
なし	サルカニ ① モモタロウ ① コブトリ ① ハナサカヂヂイ ① ウラシマノハナシ ①	サルカニノモノガタリ ① モモタロウ ① ハナサカヂヂイ ① うらしま太郎 ② はごろも ②	シタキリスズメ ① モモタロウ ① コブトリ ① ハナサカヂヂイ ① かぐやひめ ② 一寸ボウシ ② 百合若 ② はごろも ②	サルトカニ ① ネズミノヨメイリ ① モモタロウ ① うらしま太郎 ②

昭和33年～45年（指導要領による）

A	B	C	D	E
うらしま太郎 ① こぶとりじいさん ① はなさかじじい ② したきりすずめ ② かちかち山 ② かもとりごんべい ②	いっすんぼうし ① かぐや姫 ②	いっすんぼうし ① はなさかじじい ① ももたろう ① かぐやひめ ② うらしまたろう ② おむすびころりん ② ききみずきん ②	うらしまたろう ① てんぐとおひや ① くしよう ① わらしべちょうじゃ ② かもとりごんべい ②	うらしまたろう ① ねずみのよめいり ① 一寸ぼうし ② したきりすずめ ② かぐやひめ ② かさこじぞう ②

F	昭和46年からの指導要領による A	昭和46年からの指導要領による B	昭和54年 日本図書	昭和54年 学校図書
いっすんぼうし ①	いっすんぼうし ① ねずみのよめいり ① てんぐとおひや ① くしよう ① わらしべちょうじゃ ② 夕づる ③	こぶとり ①	いっすんぼうし ①上 わらしべちょうじゃ ①下 やまんばのにしき ③下	きんたろう ①上 ふしぎなたけのこ ①下 かさこじぞう ②下 夕鶴 ④下

昭和55年（新指導要領による）

光村図書	東京書籍	教育図書	日本図書	学校図書
かさこじぞう ②下 力太郎 ③下 吉四六話 ④下	おむすびころりん ①上 かさこじぞう ②下	うらしまたろう ①上 かさこじぞう ②下 夕鶴 ③下	かにむかし ②下 かさこじぞう ②下 夕鶴 ④下	ふしぎなたけのこ ①下 かさこじぞう ②下 きっちょむさん ③上

光村図書	東京図書	教育図書
おむすびころりん ①上 かさこじぞう ②下 力太郎 ③下 吉四六話 ④下	かもとりごんべえ ①下 かさこじぞう ②下	おむすびころりん ①上 かさこじぞう ②下 夕鶴 ③下

イ）○数字は学年を示す
ロ）国定第1期～昭和46年よりの指導要領によるA，Bまでは，本学研究年報第23巻より
ハ）国定第1期　明治3年～
国定第2期　明治43年～
国定第3期　大正7年～
国定第4期　昭和8年～
国定第5期　昭和16年～終戦まで

女子大研究年報第33巻（片山）

て永くその中に残る」と英国の児童図書館員コルウェル(Eillen Colwell)が述べている。私は「良い絵本」について一九六六年頃から四年程研究したが、次に日本の民話(昔話)が小学校の国語教科書ではどのように扱われているかに関心をもち、一九七〇年と十年後の一九八〇年に若干の考察を行った。

五大日本昔話とは一般に桃太郎、猿蟹合戦、舌切り雀、花咲爺、かちかち山である。さらに浦島太郎、一寸法師、瘤取爺、文福茶釜、鶴の恩返し、などを加えて十大昔話といっている。当時女子大生約六〇〇人を対象に行った調査によると、十大昔話は何れも九五%以上が知っていた。しかし「語りとして聞いたことがあるか」については、八五%が十年後の調査では五七%に減っていた。最近、親子の触れ合いがテレビなどにとってかわられ少なくなったと憂慮されているが、母の口から語られる民話こそ心を通わせあった〝愛〟の思い出として永く心を温め続けるのではないだろうか。

「すき」な日本の昔話は、調査対象が女性であったこともあって「かぐや姫」が一位、「夕鶴」が二位で、「笠地蔵」「おむすびころりん」「花咲爺」「桃太郎」「一寸法師」などが続いていた。「きらい」な話は「舌切り雀」「かちかち山」が一〜二位で、その理由も《残酷》《かわいそう》などが多かった。「かちかち山」の狸、「猿蟹」の猿、「こぶとり爺」などへの《仕返しがひどすぎる、こらしめのためでも殺すのはよくない》と答えていた。しかし一方「舌切り雀」では《おじいさんの優しさに心が温まる、雀の宴会が楽しい》また「猿蟹合戦」では、《正義感がよくあらわれている、皆で助け合って悪者をやっつけた》などの理由で、すきな話としてもあげられていた。すきな話として人気のあった「夕鶴」「かぐや姫」には、非現実的で空想の世界のできごと(ある筈のないということが全く明らかで、ばかばかしい)が、わずかではあるが、逆にきらいな理由にもなっていた。

民話の本質を摑まないで表面に現われた事象のみで考えると、民話の価値が充分味わえない。残酷さが幼い心に強い印象を残して、すきになれないことはよくあることだと思う。現象面のみでなく、なぜそういう残酷な行為をしたのか考えてみる必要があるし、この話はどこが強調され、どういう目的で語られているかということが問題だと思う。悲しい悲劇的な話、怖ろしい話でもよいものであることがある。私達を悲しませたり、不安にしたり、ショックを与えるかもしれないが、それもまた想像力を養い、知性を啓発し、心情を強め、私達自身の姿を見せてくれることがあると思われる。

表には、一九七二年と一九八二年に報告した論文に使用した、国定第三・四期の復刻版も含めて約二四〇冊の小学校の国語教科書から、日本の民話(昔話)名のみを示した。

昭和五十五年度の指導要領改訂による教科書には、今回調査対象にした五社すべてに「かさこじぞう(笠地蔵)」が教材としてつかわれていた。「かさこじぞう」は福島県に伝わったものを原型に童話作家の岩崎京子が昭和四十二年に再話し、民話絵本として発表、昭和五十三年から採用されたも

ので、すべて全く同じで、かなり長文であたが省略もなかった。この話は全国的に伝播され、北は青森八戸から南は佐渡杵島に及んでいる。一例であるが、岩手県陸中には「六地蔵様が恩を返す」「石地蔵に恩をおくられた」「七人地蔵様」などがあり、六地蔵から十二地蔵まで地方や語り手によって色々であるが、話は大体同じである。

「かさこじぞう」など九つの民話は教科書批判の対象となった。一九八〇年、自民党の機関紙「自由新報」に「偏向的作品」と攻撃された。民話教材「かさこじぞう」は日本の民話だが、ひどく暗く貧乏物語だと批判が展開され、出版社の方で差し替えまで検討された。東京都の中学校長、中山渡氏は「……もし貧乏物語としても、どうしていけないのだろうか。かつて農村、殊に山村は貧しく、自然条件に左右されていた。その日々を、ぼくらの祖先は物の乏しさ、技術の貧困、権力のエゴなどに耐えながら生き抜いてきた。それを民話、民謡、年中行事にも反映している。こういう常民の生活感情に、すぐれた言語形象・文学作品を通して迫ることは、大切な教育である。そして有力な人間認識、歴史認識の素因をつくり、文化文明という人間英知の結晶を省察する契機ともなる……日本人の文化（生活）の将来という視野から考えあいたいものである」（朝日新聞一九八一年）と述べている。児童文学者、日本民話会などによる広い範囲で運動が展開されて、出版社では差し替えを取り止め、五十八年度使用分から更に三年間継続して使用されることになった。

最近、教材として採択されている民話は、十年前の「一寸法師」の場合のように極端な縮少で話が全く面白くないといった傾向は是正され、「笠地蔵」の場合、現在は長文でも省略もなく、忠実に伝達されて新鮮な民話となって採録されている。

今日のように日進月歩で近代化され、文明の進んだ社会では、すべてを合理的精神で解決しようとする傾向が強い。ロマンチックな夢を追い非合理な要素を多く持つ民話の入り込む余地はなくなってきたという見方もされる。今日の現代っ子と民話の世界とは随分かけ離れているように思われるが、子ども達は思ったよりずっと民話がすきなようで、私が行った調査結果もそれを裏づけるように思える。

（女子大学教授）